

五条坂京焼登り窯（旧藤平）第2次発掘調査 現地説明会

はじめに

五条坂京焼登り窯（旧藤平）は1909（明治42）年、京都陶磁器合資会社が輸出用粟田焼素地を焼成するために築いた京式登り窯です。当初は「西の窯」と「東の窯」が2基、縦に並んでいました。戦時中に藤平窯業（のちに藤平陶芸）が運営するようになり、1944（昭和19）年、京都最大と言われた「西の窯」を壊して「呂号焼成窯」（石炭窯）を築きました。「呂号焼成窯」は1957（昭和33）年までは残っていましたが、その後、電気窯やガス窯に置き換わりました。現在は「東の窯」だけが操業当初の位置を保っています。

京焼の近現代史と登り窯の歴史を探求するため、2016年8月に第1次発掘調査を行いました。2020年10月には「東の窯」の三次元計測を行い、2022年8月17日から第2次発掘調査を行っています。

1. 「東の窯」と覆屋の記録

（1）「東の窯」の写真測量—フォトグラメトリーを使った三次元計測—

2021年10月には早稲田大学余語琢磨氏・田畑幸嗣氏、埼玉県立博物館ナワビ矢麻氏らとともに、「東の窯」の写真測量を行いました。今回はさらに1の間と2の間の内部の写真測量を行いました。今後、これらのデータを合成し、「東の窯」の構造を検討してゆきます。

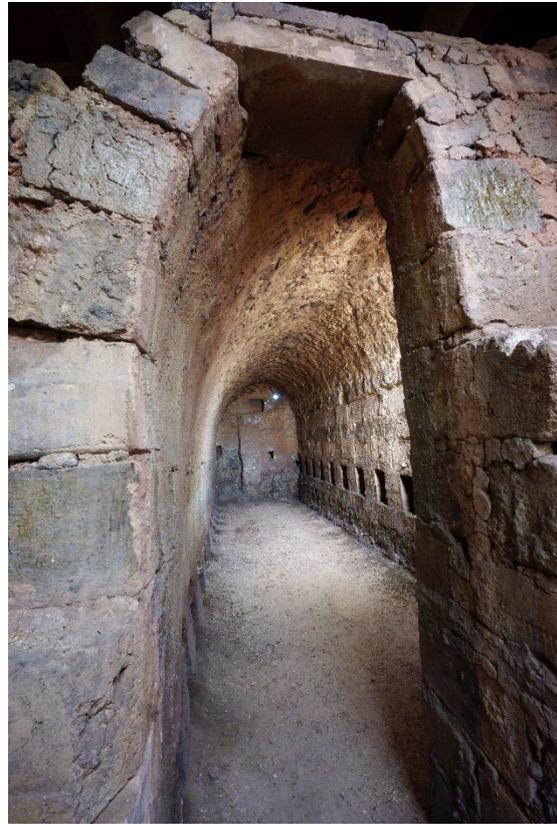


Figure 1 合成途中の五条坂京焼登り窯（旧藤平）（ナワビ矢麻氏作成）

1の間と2の間－内部の観察－



1の間



2の間

普段は内部にサヤ（ゴウ）が積まれてみることはできませんが、今回、写真測量を行うため、サヤをすべて取り出しました。いずれの部屋も胴木間（一番下の部屋）側の壁がよく焼けていました。1の間の奥壁（2の間側の壁）は、焼け歪んでたわんでいました。さらにたわめば窯の積み直しをしたのでしょうか。一番温度が高い部屋の焼け具合がよく観察できました。

(2) 覆屋の内部空間の写真測量



「東の窯」北側の壁面3D写真

この窯の周囲は多くの道具類があふれて雑然としていますが、それだけに迫力があります。創業当時の賑わいが髣髴とされます。その雰囲気記録するため、登り窯だけでなく、周囲も含めて写真測量を行い、記録を残すことにしました。今後、データを整理して公開してゆきたいと考えています。また、工房の各所を360度カメラの映像も撮影しました。

(3) 9の間の発掘調査

「東の窯」は盛土をして自然地形とは逆向きの傾斜面を作っています。しかも、何度もつくりかえられているようです。その履歴をしるために、一番高い9の間の床面を小規模に発掘しました。まだ調査中ですが、床面を何度か盛り上げたことがわかります。

2. 「西の窯」の発掘調査

(1) 「7の間」北東隅（第2トレンチの調査）

2016年の調査区を拡張しました。「7の間」（もしくは「6の間」）の残存部分を確認できましたが、呂号焼成窯で壊された部分が多いことが確認できました。



「西の窯」の7の間（もしくは6の間） 白色の砂が床面

(2) 胴木間北側（第6トレンチの調査）

「西の窯」の胴木間は建造物で調査できないため、その北側を発掘して当時の状況を確認しようと考えました。残念ながら、窯に直接かかわる遺構は確認できませんでしたが、中世～江戸時代後期の遺物を含む整地層が確認されました。操業開始時期に周辺の地形を改変し、整地した可能性があります。今よりも1mあまり低かったようです。現在の地表面は戦

中・戦後の比較的新しい盛土によるものかもしれません。

第1次調査でも平安時代末の瓦が出土していますから、この周囲に平安時代から中世に至る遺跡が存在したことも確実になってきました。右の写真のレンガ積みは「西の窯」を埋めた後で作った土留め遺構です。

(3)「呂号焼成窯」(石炭窯)の調査(第1トレンチの調査)

昭和33年の測量図に石炭窯の位置が描かれています。1トレンチ・2トレンチの拡張した部分では確認できませんでした。基礎だけでも残っていないか、さらに検討してゆきます。



発掘した6トレンチ

謝辞

調査に当たっては、京都市教育委員会教育環境整備室のご理解と協力を頂きました。また、藤平陶芸、六原自治連合会、旧藤平登り窯に学ぶ市民の会の皆様にもご協力いただきました。ありがとうございました。



1トレンチ拡張作業

編集・発行 立命館大学文学部 考古学・文化遺産専攻 木立ゼミ
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1